

べ141件)、その中で松井田高校の存続を要望する旨の意見が83件あった。

こういう卒業生と父母、地域に支持される松井田高校の学校づくりはどのようなものか。どのようにして実現できているのか。「ぐんま教育のつどい2011」(2月11日)全体会はそれを明らかにして学びあうものであった。

追い詰められる担任団…指導のあり方を変えよう!

現在の松高の取り組みのきっかけは、1990年代中ごろ、生徒指導主事の佐藤毅さん(故人)の問題提起で始まった。

その頃の松高は、さまざまな問題(喫煙癖、いじめ・暴力、低学力・学習障害、家庭環境・経済状況の悪化等々)を抱えて入学してくる生徒たちに、熱意を前面にたてた指導で向き合った担任団が次第に追いつめられるという状況だった。

それを「なんとかしなければ…」と、指導のあり方を全面的に見直し、「謹慎」から「特別指導」へ、「生徒指導」から「教育相談」へという転換を成し遂げた。

当時の養護教諭・教育相談係の吉田真弓さんのレポートによれば、従来の「悩みを持つ生徒の来談を待つ」から「教員が気になる生徒に声をかける」=「企画カウンセリング」に変え、問題行動に対しても「指導する」から「心配する」スタンスに変えた。その結果、教員=「叱る・指導」から「話を聞いてくれる・話して楽しい・頼れる・すっきりする」へと教員へのプラスイメージが生まれた。

さらに生徒に対しては「良いところを伸ばす指導」を目標に、「社会、生徒、学力観の変化に対応した指導」、「生徒に過度のストレスをかけ反省を強いる指導方法」を見直し「厳重注意」から「協議・話し合い」へ、などの取り組みを行っていった。

勇気ある転換である。今でも、声高に管理的な「厳しい」指導が叫ばれている学校があ

ると聞く。

当時の佐藤先生のレポートを読むと、その根底に、佐藤先生の生徒と状況に対する深い分析があり、今改めて教えられる。

それぞれの持ち場、持ち味で…6人の教職員が語った現在の松高教育

「教育のつどい」全体会で一つの学校の様々な職種の教職員と一緒に報告するという機会はめったにない。そのことが松高の教育の有り様を示していた。

(1) 現生徒指導主事・櫛島勝さんの報告

現在は安中地区以外の生徒が過半数になり、さらに様々な問題を抱えた生徒が入ってくるが、様々な人間がいる中で生徒を成長させることが大切と考え「松高はいろんな子がいるからいい学校」と話している。

問題点に対しては、いつも生徒の傍にということを中心に、とにかく生徒の話を聞くようにしている。また様々な体験を無理なくさせることによって問題が解決されていくこともある。松井田ボランティアクラブ(MVC)は「一回でも、いつでも、好きなものを」というスタンスで行っているが、すべてお膳立てしてやっても、生徒はそのうちに自分からすすんで出来るようになる。インターシップでは「この子にこんなことができるんだ」と驚かされることもしばしば。松高で行われるさまざまな行事に参加して生徒たちはいい顔をして育ってゆく。

「保護者や地域の方と共に子供を育てよう」というのは松高ではお題目ではない。定員割れを起していないのも同窓会やPTAの方たちの中学校まわりのおかげだし、地域の方は本当によく松高の生徒を見ていてくれる。地域の人にはいつも感謝している。

今までに築かれてきた松高の良さとは、「短所を長所に」ということであり、生徒も学校のあり方もそれでやってきている。

また松高の人を育てる考え方は、生徒だけで

なく、教師を育てることにもつながっている。大切なのが現実とどう向き合うか、どう折り合っていくか。佐藤さんの「大きいのはいらぬ。ヒットを打ち続けよう、粘り強く。それがプロ」という言葉がいつも胸にある。できたことが50%でも、それが積み重なってだんだん高まっていく。今後は変化する生徒や教師集団にどう対応してゆくかが問題。

(2) 進路指導主事・萩原菊男さんの報告

生徒一人ひとりの進路希望を実現させるためにアドバイスし、サポートしている。就職が厳しくなっている中で、いかに就職先を開拓していくか。インターンシップでお世話になった酪農家から、後継者にとという話もあった。地域振興という芽を育て、農業関連の企業や観光資源の開発という方向もある。公開LHRで卒業生から話を聞いたが、卒業生のパワーと母校および後輩たちへの熱い思いを感じた。

(3) 公仕・原田典昭さんの報告

たとえば年度末に行う教室の床掃除をする中でも、床の汚れ具合や位置などから生徒のさまざまな面を発見することができる。

米作りプロジェクトを行っているが、田植えから脱穀まで、すべて自分達でやって、その米で餅つきをやるから意味がある。生徒はいろいろな場面で活躍することによって成長する。

卒業してゆく生徒が、自分たちが捨てた教科書の荷造りを自ら手伝ってくれたが、最初と最後では縛り方の上手さに差がある。こんなささいなところでも、生徒は確実に成長してゆく。

(4) ボランティア係の小板橋政隆さんは、MVCの活動について、司書の松浦政子さんからは、図書館での生徒とのかかわり（ありのままを受け入れている）や図書選定の情報共有についてなどの報告がされた。

また事務の橋爪文夫さんからは、事務室から見えた貧困と格差の実態が紹介され、そん

な中でも「生徒はけなげに現在を生きている」と結んだ。

松高を大切に思って、中学校まわり …同窓会長&PTA 会長新川徳夫さん

自分たちは松高をとっても大切に思っている。入試にむけては、新入生確保のために中学校まわりもやるし、以前統合の話が持ち上がった時には反対運動もやった。県は「適性クラス」というけれど、小さい学校だから一人ひとりの顔が見える。松高のような学校は絶対必要だし、松高の先生方が一生懸命やってくれていることも自分たちはよく知っている。

松高のおかげで今の自分がある …卒業生の発言から

入試前は悪いウワサも聞いたが、見学に行ってみて、明るいし受け入れてくれていると感じて受験した。今までで一番楽しかったのは松高の時代で、卒業しても行ったら誰かいて受け入れてくれる。松高に入って、変わった3年間だった。今こうやって介護の仕事ができていけるのも、こういうところに出てきて発表できるのも、松高で自分が成長したからだと思う。

学ぶこと…それぞれが今の職場で、 自分の登るべき別の山を発見しよう

この企画のきっかけを作った渋谷正晴さん（高崎商業高校）は、学ぶべきこととして次のように書いている。「佐藤さんの実践の素晴らしかったところは、自身のヴィジョンを誰もが納得して参加できる形に仕立て、組織化したところにあると思います。やみくもに理想を追い求めるのではなく、見栄えのいい他の学校の姿を追い求めるのでもなく、まず目の前にいる生徒のありのままの現実に合わせて教育目標を立て、無理をせず、常に生徒に寄り添った現実的な指導を続けるということなのだろう。」（文責：瀧口典子）